

第8回 保育者集団の質は保育の質 ～大人も「あ～楽しかった！」の毎日を～



講師 静岡福祉大学特任講師 岡村由紀子 氏

はじめに（第7回保育者資質向上研修会質問より）

質問①

子どもに興味がない保護者がいる。ネグレクトと放任主義の大きな違いはどこにあるのか。

ネグレクトは、大人の側にあまり自覚がなく、子どもにとって生きていくための、食べる、寝る、着替えることが十分なされないことです。子どもの視点からみると、子どもの権利条約違反になります。つまり、子どもが大事にされていないのです。その最たる例が、埼玉県で起きた事件です。子どもにとって最善の利益を守るプロ集団が、保育者であり教師です。精査して子どもの視点で保護者にわかる言葉で伝えていくことが大切です。

親の対応で悩む保育者が多くなっています。このような時、園は、保護者の願いを聞き、子どもの視点で見えていきます。そして合意できるところはここですね、と保護者に伝えます。保育者の働く意識を失くすような保護者の台詞に対し、プロとしてどう対応していくのか。相手が何を望み、なぜこのようなことを言うのかを考えていかななくてはなりません。

こうなると、放任主義であろうとネグレクトであろうと、子どもの視点に立っていない保護者の行動だということが共通だと言えます。そこをどう相手に伝えていくかが問われていると思います。

質問②

親が生活リズムを作れない。どうしたらいいか。

結果として、子どもも生活リズムができていないと考えます。ですから、保護者にどんなことが困っ

ているかを聞きます。保護者がどこで苦しんでいるかを一緒に考えます。このような方法なら、1年目の保育者でもわかります。

自分の意見を通したいがために、保育者にぐさぐさ言う人もいます。ですから、どの職員が窓口となり対応するか、集団での対応が大事です。保護者の言葉がどこから出てくるのかを考えていくのです。

保護者の生活リズムができないのはなぜか。あるべき姿に親子が合わせるのではなく、大変な親子の中に大事にしたいところを聞いていきます。いわゆる親支援です。個人対応は絶対無理です。園のみんなに対応しないと苦慮することもありますので、みんなの知恵で方法を考えることが必要です。

質問③

以前、保護者に「子どもいないもんね。子どもできたらわかるよ」と言われ、何と伝えたら良かったのか今も悩んでいる。

これは、今日のテーマと繋がります。園と家庭ではフィールドが違います。家庭は1対1対応で、園は1対多です。幼稚園・保育所では、「20人の子どもがいて、1人の子どもに面倒をかけられない」という1対多を言っているわけではありません。

1対多というのは、東で見るというわけではありません。子どもにとって保育者はモデルです。集団の中で子どもが困っていたら「どうした？」と聞き、「お手伝いしようか」と声をかけます。保育者の姿から学んでいる子どもは、困っている友達を見かけたら、「どうしたの」「靴履けないの」と声をかけてあげられます。ですから、どういう保育を受けているかが大事で、これが集団の教育力です。

乳児がトイレに行くというトイレトレーニング。2歳児が散歩から帰ってきてトイレに行く姿を見ている0歳児や1歳児が、“自分もお兄さんやお姉さんみたいに”と思いながら、集団の中で自立していきます。園には、たくさんモデルがあります。つまり1対多は、子どもが集まることによって、そこに子ども同士の教育力が生まれます。その方法を使って教育する場のプロは皆さんです。ですから、子どもがいるとかいないとか、男とか女とかではないのです。

1 保育者の仕事とは？

(1) 3つの特徴を知る

保育者の仕事の特徴は3つです。一つは、子どもの未来に責任を持つことです。嘸む、たたく子どもであっても、ずっとそうではありません。必ず変わっていくと思えるかどうかプロの技量です。ベテランの保育者は、そのような行為がずっと続くとは思っていません。その変わるプログラムをつくるのが、保育の専門性です。

保育者が「おせっかいな子」と言うことがありますが、おせっかいというのはいいイメージにはなりません。私は、おせっかいとは言わずに「人に関心がある子」と言います。すると、次の働きかけが変わってきます。おせっかいと聞いた時は、おせっかいはどういう時なのか、事実を聞きます。例えば、時間帯について「ものを使いたい時なのか」「“この子”が好きな時なのか」などの事実で話をしていくと、方策が見えやすくなります。それが、子どもの未来に責任を持つということです。

二つめは、子どもの可能性に無限の信頼を寄せること、三つめは、労働対象が労働主体に働きかけることにより、労働意欲が自然に生まれることです。労働対象は子どもです。労働主体は保育者です。子どもが保育者に働きかけることによって、保育者は自分の仕事が楽しくなります。つまり、自分で楽し

くしているのではなく、子どもに楽しくさせてもらっているのです。共同作業と言えます。

保護者にわかる言葉で伝えるには、こちらの専門性を上げ、プロとしての力をつける必要があります。この力をどうつけるかという、このような集団学習と自分で本を読むなどの個人学習です。子どもに嘸む状態があった時、活動が「面白くない」と言われた時、それは保育者としてのスキルが上がる時です。子どものせいや保護者のせいにせず、学習をして保育力を上げる事です。

(2) 保育者自身が保育環境になることを自覚する

乳幼児期は学童期と違い、保育者自身が保育環境になります。子どもにとってのモデルとなります。乳幼児期は、一緒に遊び一緒に動き、体を通してモデルを提示しないと学びになりません。

子どもは、保育者の姿を見て育ちます。人としての普通の関わりが、子どもの関係性を豊かにし、保育の中の「集団の質」を上げていきます。ですから、自分自身がどのような価値観を持ち、どう接するかという人間性が問われます。

(3) 学び続ける大切さ…保育者のセンス

保育者のセンスは、仕事として鍛えられます。大阪教育大学の秋葉英則氏は、「教育という仕事、営みは、どんなに優れた先達者であろうと、その先達者一人でなせる仕事ではない。大人の周りに普通の人が必要。おせっかいの先生、ポーっとしている先生、いろいろな先生がいる。いろいろな先生がいて、調和を生み出すことで、一人の子どもを理解する土台をつくる。だから、みんな違っていいのです。その違いを感じ取れる心の広さを自分に課したいものです。」と言います。「あの人の素敵などころはここで、私は私色で。」というように、ハーモニーとなればいいのです。

東京家政大学の加藤繁美氏は、「子どもの実践を

記入し、その中に見える子ども・保育者の姿・営みなどが、自分の子ども理解・保育観・保育センスを鍛えるチャンスとなる。」と述べています。

まず事実を書き、思ったことはカッコに記入します。考察するかしないかは自由ですが、子どもの事実で話し合います。そうすれば、経験年数が1年目も10年目も関係ありません。

「この子、噛むんだよ。」と言うより、「どんな時に噛むの。私が見ている時は、こんな時だった。」と伝えます。すると、この子が変わる保育実践の方法が見つかります。つまり保育は創り出すことです。その前には、子どもに共感し、子どもの心を想像します。これは、保護者の関わりも同じです。保護者の願いを想像し、提案し、一緒に考えることが必要です。自分が生きていく上で人として大事にしたいものがあるはずで、日常の保育を創る時、方法論だけではなく、人として子どもと向かい合う事が大切です。

(4) 子育て環境を創る

一人の人間として、自分を客観的に豊かにしていくことが大切です。それは周りに関心を持つことです。たとえ小さいことでも、関心を持つことが、人間としての生き方の土台になります。それは、子ども観・人間観を鍛え、やがて子どもの周りに豊かな環境を創ることに繋がっていきます。

2 保育者も楽しく豊かな保育創造のために

(1) 大人の視点から子ども視点へ

保育者が楽しく保育をしていないと子どもも楽しくありません。神戸大学の赤木和重氏は、「“褒め殺し”という言葉があり、褒めることを手段化したら、子どもの心には届かない」「遊びは共振すること」と言われています。本当に感じた時だけ褒めればいいのです。

保育者も楽しく豊かに保育をするためには、大人

の視点で大人同士が子どもを語ってはいけません。大人の視点というのは、肩書きや経験です。そうすると、職場では大人の目線が気になって経験と勘になりやすく、結果、自己学習を含め、学びを豊かにする集団学習がなくなります。

(2) 語り合う・学び合うポイント

ポイントは、子どもの事実で語ることです。子どもにとってはみんな大人であり、先生です。保育者が仲良く手をつないで保育をすればするほど、子どもの発達はぐんと上がります。ですから、子どもの事実で語ります。

先輩保育者が、「この子、落ち着かないのよ。」と言ったら、若い保育者は、「どのような場面ですか？」と聞けばいいのです。自分の考えを子どもの事実と結びつけて、相手にわかるように伝えることを一人一人が実践していきます。

そして、相手の考えが自分と違った時こそ、一方的ではなく、複眼で子どもを理解します。意見が違う時、自分の子ども観・保育観を鍛えるチャンスです。違っていても自分の意見を言うことは、自問自答を繰り返してストレスをためにくく、自分の保育観の構築となります。事実で話すことが、「子どもの最善の利益」に近づきます。経験・思い・勘では、子どもの未来は描けません。

私達の専門性は、現実の子どもを捉え、遊びや生活で今、何を体験させていくと、子ども達が変わっていくのかを考えることです。Aだった子どもがBに変容し、豊かになっていくということです。その時何をしたのかが、私達の保育の宝物になります。そして、積み重ねると園の財産になっていきます。

私の職場では、1クラスに全員が集まり、学年を超えて今日の話をしながらのそうじタイムを大事にしています。日常の小さなことはそこで話し、困ったことはそこで解決していきます。

おわりに

今年度、県立短大の1年生に、授業を29回やりました。その都度、授業後に何が学べたかを書いてもらいましたが、次に紹介するのは、先々週、今日の演題「保育者集団の質は保育の質」の授業後、18歳の学生からもらったものです。

事例1『保育は、本当に子どもの人生の土台で、乳児期に「自分を認めよう」という自己肯定感が育つかどうか、子どもが自分を大切にできるかに関わってくるし、自分を大切にできなくて、人を受け入れようなんてできないよな・・・と改めて感じました。子どもにとってたった一人でも信じられる大人がいるかどうかが大切で、信じられる大人が要ることで、自分を大切に自分らしく歩み出せるのだと思います。』

なので、本当に子どもや保護者の方を裏切らないよう、誠実さと責任を持ちたいです。また、そのように子どもの人生の土台を育んでいくには、計画を大切に保育者が知識を持って見通しを持つことが大切です。でも決まりきった頭にならずに、子どもと常に向き合い、答えを決めつけたり、誰かに合わせたりするのではなく、考え学び続けることが大事だと思います。』

授業において、子どもをキーワードにした記事を出し合い、事実と考察を分けて書くことと現実の子ども理解を行っています。

事例2『2つの記事について触れましたが、共通して言えることは、「分かった気になる怖さ」だと思います。やっぱりこの世界で生きていきたいときに、大前提として「答えはない」ことを忘れてはいけません。「わかりきること」は絶対になくて、子どもと向き合い、自身で思考し、学び続けることが欠かせません。だからこそ先生は、キャリアの長さでなくて「子どもの人生を背負う」覚悟、そのた

めに「学び続ける」覚悟をしたことに目を向けていらっしゃるのかな、と思いました。

ベテランも新人もそして、私達のような見習いも、今の自分の全力で覚悟をしています。「誠実に、謙虚に」と言い続けることは、とても難しいことだと思います。「どんな条件の中でも人生の主人公を！」というのが、保育の役割だと学んだわけですが、計画通りにならなかった時のために必要な「クリエイティブさ」は、子どもから刺激してもらいものなのだと思います。子どもから学ばせてもらっている感謝の気持ちも忘れるわけにはいきません。ひたすらに全力であれば良いわけでもなく、「頭は冷静に」しているためにも計画が大切だし、学びの大切さが改めてわかりました。』

人間はみんな違うので、決して答えはありません。私も、私の人生の経験でしか語れません。だからここで教えてもらっているかということ、向かい合っている子どもが自分の思うようにならなかったり、本当に悲しかったり、嬉しかったりと、そのような中で子どもを理解していくのです。その繰り返しの中で、今の子どもをつくっていくのです。保育者はクリエイティブな仕事です。クリエイティブであるためにも、自分の底が枯れないように、学びを深めていくことが大切です。

子どもが未来を笑顔で過ごせるような保育を創る保育者になれるよう、私もともにがんばっていきたいと思います。

第8回 焼津市保育者資質向上研修会
平成31年2月13日(水)
会場：焼津公民館 大集会室